

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號六第 卷十五第

月六年五十和昭

論叢

支那に於ける農地の典に就いて…………… 經濟學博士 八木芳之助
統制經濟下に於ける統計と經理…………… 經濟學博士 蜷川虎三

時論

利潤統制の革新的意義…………… 經濟學博士 谷口吉彦

研究

清末紙幣考…………… 經濟學士 徳永清行

『道德情操論』の研究…………… 經濟學士 白杉庄一郎

徳川時代に於ける 丹後縮緬機業の發展過程…………… 經濟學士 堀江英一

說苑

價格に於ける歴史的傳統性…………… 經濟學士 桑原晉

北陸の漆器工業…………… 經濟學士 田杉競

附錄

彙報

外國雜誌論題

本誌第五十卷總目錄

『道徳情操論』の研究

白杉庄一郎

經濟學の父アダム・スミスが死んでから百五十年になる。この年に當つて今一度スミスの經濟學をその根柢から理解し直してみるのは時宜を得た試みと言はれぬこともないであらう。のみならず、新しい國民經濟學の建設といふ我々の直接當面の課題がまたしても我々の關心をスミスの經濟學へ引戻すのである。スミスの經濟學をその根柢から理解し、それを超えようとする努力は所詮幾度か繰返されなければならないであらう。

スミスの經濟學の思想的根柢は何といつても『道徳情操論』に求められねばならぬ。『道徳情操論』はまた「人がまづ第一に隣人の行爲や性格について、次いで自分自身の行爲や性格について自然的に判斷する諸原理の分析に關する論文」といふ副題をもつてゐる。¹⁾そしてそれは七部からなつてゐるが、「行爲の適正について」論じた第一部と「功績と罪過または報賞と處罰との對象について」の第二部とが他人の情操や行動に關する我々の判斷の起原と基礎とを明かにせんとしたものであり、第三部で「我々自身の情操や行動に關する我々の判斷の基礎および義務の觀念について」論ずる。第四部は認の情操に對する有用性の影響について」と第五部「道徳的是認ならびに

1) The Theory of Moral Sentiments, or an Essay towards an Analysis of the Principles by which Men naturally judge concerning the Conduct and Character, first of their Neighbours, and afterwards of themselves. To which is added A Dissertation on the Origin of Languages. 但しこれは1790年第六版の標題である。1759年の第一版の標題は單に The Theory of Moral

否認の情操に對する慣習および流行の影響について」と第六部「徳の性格について」とは兩者の總括とみてよく、第七部は「道德哲學の諸體系について」の論評である。

こゝで先づ見て行きたいと思ふのは第一部「行爲の適正 (the propriety of actions) について」である。それは他人の情操や行動が適正であるかどうか、上品であるか下品であるかについての我々の道德的判斷にかゝはる。ミスはその第一章に於て「適正の感覺^{センス}について」論ずるに當つて、まづ道德的判斷一般の原理を明かにしてかゝる。第一節「同情 (sympathy) について」がそれである。彼は「道德情操論」を次の句をもつて始めてゐる。

「人間といふものがどれほど利己的 (egoistic) なものだとか考へられようとも、人間性の中には明かに、他人の幸福に關心をもたせ、他人の幸福を——それから彼はそれを見るときに悦びの外には何物も得ることはないものであるけれども——自分に必要ならしめる若干の原理が存在する。憐みとか情けとかいふのは、即ち我々が他人の不幸をまざまざと見たり考へさせられたりする場合に感ずる情緒はこの種のものである。我々は屢々他人の悲みから悲みを得るのであるが、このことは極めて明白な事實であつて、それを證明すべき何らの實例をも必要としない事柄である。何故ならば、この情操は、人間性に基く他のすべての本源的な激情と同じく、決して徳のある情け深い人々——尤もこれらの人々は恐らく極めて鋭くそれを感ずるであらうけれども——に限られてゐるのではないからである。極悪者といへども、社會の法の最も凶惡な違反者といへども、それを全く缺いてゐることはないのである。」

『國富論』に於て經濟行爲の根本動機を利己心に求めたミスミスは『道德情操論』を非利己的な人間性から始めて行く。非利己的な人間性から出發して、彼が如何に利己心を基礎づけたか、言ひ換へると個人主義的經濟倫理の基礎づけが如何になされたか、及びそれを超える道がどこにあるか『道德情操論』の研究の根本課題である。

我々は他人の不幸に對して憐みや情けを感ずる。而してそれは我々が他人の身になつてみるによつて可能

である。「我々は他の人々が感じるところを直接経験しないのであるから、他の人々が如何なる感動を受けるかを思ひ浮べることの出来るのは、たゞ同じ境遇に於て我々自身が感じるであらうところを考へてみることによつてである」。想像によつて我々は受難者の境遇に我々自身を置く、いはゞ彼の身體の中へ入つて行き、彼とある程度同一人となる、そして彼の苦みを思ひ浮べるならば、我々は程度こそ弱いが全く同一種類の感じを受取る。これが他人の不幸に對する我々の同感 (altruistic feeling) の根源である。ところで、我々の同感を喚び起すのは苦み又は悲みを作り出す事情だけではない。「直接の當事者が何らかの對象について懐く激情が何であらうと、傍觀者の胸中には彼の境遇を考へて類似の情緒が湧き上る」。喜びに對しても、感謝や憤激に對しても同様である。スマイスは我々のすべての同感を「同情」(sympathy) といふ言葉で表現する。スマイスのいふ同情が單に他人の不幸に對するものでないことは注意を要する。『國富論』に於て自愛心を經濟行爲の根本動機としたに對して、『道德情操論』に於ては同情が重要な原理とされてゐると言はれる場合、その同情といふのは自愛心に對する他愛心、利己心に對する利他心といふやうな行爲そのものゝ原理ではないといふことを記憶して置かなければならない。成程、「同情は如何なる意味に於ても利己的な原理とは考へられない¹⁾」然しそれは利己心に對立して行爲の動機となる原理ではなくて、どこまでも道德的判斷の原理なのである。

同情を道德的判斷の原理として基礎づけるためにスマイスは第二節で「相互的同情の悦びについて」述べる。「他の人々が我々自身の胸の中のですべての情緒に同感することほど我々を悦ばせるものではなく、また我々はその反對の様子を見る時ほどいやな思ひをすることはない」。同情の悦びは決して自愛心の純化から説明し得

1) Part VII. Sec. III. Chap. I.

るものではなく、もとの感情の性質とは獨立に、それだけで悦びの源泉となる情操である。「同情は喜びを活気づけ、悲みを軽減する。それは満足の今一つの源泉を提供することによつて喜びを活気づけ、又それは心がその時受容れることの出来る唯一の快い感覺を心の中へ持込むことによつて悲みを軽減する。」同情は單に同情される者にとつて悦ばしいものであるばかりでなく、同情する者にとつても悦ばしいものである。「ある出来事に直接關係をもつ人が我々の同情を悦び、同情のないことによつて心を傷める如く、我々もまた我々が彼に同情出来る場合に悦び、我々が同情出来ない場合には心を傷めるやうに思はれる。」この場合にも同情そのものゝ悦びは同情の對象たる感情と區別されねばならぬ。他人の悲みに同情して我々は悲むのであるが、そのやうに同情して、悲めること自體は悦ばしいことなのである。そこに同情の悦びがある。

ところで、我々が同情の出来る場合、従つて同情の悦びを感じ得る場合には、我々はその對象を是認する。さうでない場合には否認する。かくして同情が他人の行爲や情操の判断の原理となつてくる。このことは「我々が他の人々の感動の適正または不適正をそれらが我々自身の感動と一致するか一致しないかによつて判断する仕方について」述べた第三節とその續きたる第四節とに於て詳しく説明される。

「直接の當事者のもとの激情が傍觀者の同情的情緒と完全に一致する場合には、それらの激情は傍觀者にとつて適正(Just and proper)であり、それらの對象にふさはしいやうに思はれる。反對に傍觀者がそれを自分自身の胸に移してみても、それらは自分の感ずるものと一致しないと考へるならば、それらの激情は彼にとつて不適正であり、それらを呼び起す原因にふさはしくないと思はれる。それ故、他人の激情をそれらの對象にふさはしいものとして是認することは、我々がそれらの激情に全く同情すると認めるのと同じことである。またそれらの激情をかゝるものとして是認しないのは、我々がそれらに全く同情しないと認めるのと同じことである。」

石の如く道德的判斷の根本原理たる同情を明かにした後、スミスは第一部第一章の課題たる適正の感覺の分析に進んで行く。行爲は動機と結果との二つの面から考察される。適正といふのは動機に關して言はれる。結果の側は第二部で取扱はれる。何らかの行爲がそれから起きてくるところの「感動が、それを呼び起す原因または對象に對してふさはしいかふさはしくないか、釣合がとれてゐるか釣合がとれてゐないかといふところに、その結果たる行爲の適正または不適正・上品または下品 (decency or ungracefulness) としふことがあるのである。」而して適正・不適正を判斷するのは言ふまでもなく同情すなはち情操の一致によつてである。「もし我々がそれを我々自身の胸に移して、それが惹き起す情操が我々自身の情操と一致符合するならば、我々は必ずそれらの情操をその對象に對して釣合ひがとれふさはしいものとして是認する。さうでなければ、我々は必ずそれらを度を超え釣合ひのとれてゐないものとして否認する。」

適正・不適正といふことは右の如く同情すなはち情操の一致によつて判斷される。然し情操の一致そのものが同情ではない。同情は「境遇の想像的轉換」(imaginary change of situations)によつて得られる情操の一致である。このことから同情の存立條件として二つの重要な事柄が出て来る。一方に於ては傍觀者は出来るだけ自分自身を他人の境遇に置き、他人の情操を汲み取らなくてはならない。併しながら、「人類は、自然的に同情的なもの (naturally sympathetic) であるけれども、他人に起つた事柄に對して、直接の關係者を刺戟すると同じ度合の激情を感じない。」同情の基礎である境遇の轉換は想像上のものにすぎないといふ密な意識が傍觀者の感動を直接當事者のそれと異らしめる。そこで同情が存立し得るためには今一つの條件が必要となつて来る。即ち直接の關係者

はその激情を傍觀者がついて行くことの出来る高さまで引下げねばならぬ。彼は自分の情緒を周圍の人々の情緒と一致させるためにその自然的な調子を下げなくてはならぬ。「この一致を生み出すために自然は傍觀者たちに直接當事者の事情を假定するやうに教へると同じく、自然は後者にある程度傍觀者たちの事情を假定するやうに教へる。」かくして傍觀者は直接當事者の立場に立たうとし、當事者は傍觀者の立場に立たうとする。このことによつて同情が成立するのであるが、また同時にそこから二種の徳が出てくる。第五節で扱はれてゐる「優しい徳と立派な徳」がそれである。優しい徳すなはち深切・友情・博愛等は傍觀者が當事者の情操を汲み取らうとする努力を基礎とする。立派な徳すなはち克己または自制の徳は、當事者が傍觀者の立場に立たうとする努力に由來する。なほ博愛とか克己等の徳はそれらの性質の普通の度合にあるのではなくて、普通以上の度合にある。徳は普通以上の美しきもの高貴なもの、即ち卓越である。そこに徳と單なる適正との相違がある。稱揚される價値のある性質と單に是認されるにすぎぬ性質との差異があるのである。

進んでスマスは第二章に於て「適正と一致する異つた激情の度合について」述べる。あらゆる激情の適正、すなはち傍觀者のついて行くことの出来る高さは、中庸 (moderacy) になければならぬ。激情が高すぎたり或は低くすぎたりするならば、傍觀者はそれを汲み取ることが出来ない。ところが、この中庸といふことがまた異つた激情に於て異なる。ある激情は強く表現すれば見苦しく、ある激情は強く表現しても大抵の場合上品である。人間性にもとづく種々の激情は、人類がそれに同情する傾向が多いか少いかによつて、或は上品だと考へられ、或は見苦しいと考へられる。スマスは五種類の激情をあげてゐる。食慾・性慾等の身體の欲望および身體の苦痛(第一

節)、戀愛(第二節)、憎惡および憤激——これは非社會的激情(unsocial passions)と呼ばれてゐる——(第三節)等は強く表現することの不適當なものである。これに反して、寛容・仁愛・友情等の社會的激情は度がすぎても嫌悪されることが少い(第四節)。最後に、非社會的激情と社會的激情の中間にあるものとして利己的激情(selfish passions)なるものがあげられる。我々自身の運・不運に關する喜びと悲みがそれである。これは度がすぎた場合にも憤激ほどは不適當なものでなく、適度の場合にも仁愛などの如く悦ばしいものではない(第五節)。この喜びと悲みについては第三章に於て別の觀點からなほ詳しく論究される。

二

第三章は「行爲の適正についての人類の判斷に及ぼす順境と逆境(prosperity and adversity)の影響について、及び何故順境に於ては逆境に於けるよりも人類の是認を獲得することが容易であるかといふことについて」と題されてゐる。こゝでスマスは人類の現世的活動の根本動機とそれに基く社會秩序を分析してゐる。その意味でこの章は『道徳情操論』中の注目すべき個所の一つであらう。

まづ彼は「悲みに對する我々の同情は一般に喜びに對する我々の同情よりもより強い感覺であるけれども、前者は普通後者よりも當事者によつて自然に感じられるものよりはその強度がはるかに弱いといふこと」を説明してかゝる(第一節)。「同情といふ言葉はその最も適當にして根源的な意味に於ては、他人の快樂に對する我々の同感ではなくて、苦惱に對する我々の同感を意味する。我々の悲みに對する同情は喜びに對するそれよりも普遍的なものである。のみならず苦痛は精神的なものであらうと肉體的なものであらうと、快樂よりは激しい感覺で

あつて、苦痛に對する同情は一般に快樂に對するそれよりはより強くより鮮明である。併しながら、我々が喜びに對してもつ同情の傾向は悲みに對するそれよりは強く、前者は後者よりも當事者の感情により近い。スマミスはその理由を説明するために「人類の自然かつ普通の状態」を考へる。

「健康で借金もなく曇らぬ良心をもつた人の幸福に、その上何がつけ加へられ得るであらうか。かうした状態にある者にとつては、財産の増加などといふことは總て餘計なことと言つてよからう。もしかうした状態にある者が財産を得たがために意氣揚々としてゐるといふやうなことがあるとすれば、それは全く彼の浮薄さの然らしめるところと言はねばならぬ。しかも、かうした状態は實に人類の自然かつ普通の状態 (the natural and ordinary state of mankind) と言つてよいのである。現在世の中には不幸にみち墮落してゐると歎かれてゐるが——そしてその歎きは十分根據のあることであるが——、それにもかゝらず、實際は右の状態が大部分の人々の状態なのである。」

我々はこのスマミスが極めて樂觀的な人生觀を表明してゐるのに注意せざるを得ない。そしてかうした樂觀主義はスマシスの著書の全體を貫いてゐるとも見る事が出来る。それはともかく、スマミスは考へる。この状態につけ加へることの出来るものは僅かであるけれども、それから取り去られ得るものは多い。この状態と順境の頂上との隔りは極く僅かであるけれども、それと不幸のどん底との距離は極めて大きい。この故に逆境が受難者の心をその自然状態以下に押し下げるのは、順境がそれ以上に高めるよりは、はるかに度合が大きい。従つて傍觀者は彼の悲みに全的に同情し調子を合せて行くのに、彼の喜びを完全に汲み取るのよりは、はるかに大きな困難を感じざるを得ず、また前の場合に於ては後の場合に於けるよりも彼自身の自然かつ普通の氣持からはるかに遠く離れざるを得ない。この故に、悲みに對する我々の同情は屢々悲みに對するそれよりも強い感覺であるけれども、前者は常に後者よりも當事者によつて自然に感じられるものよりはその強度がはるかに弱いのである。

この喜びに對する我々の同情が悲みに對するそれよりも本人の感情により近いといふことからスミスは第二節で「功名心 (ambition) をよび階級の差別 (distinction of ranks)」を説明する。そこでスミスは我々の生活状態を改善せんとする經濟活動の據つて來る所以を説いて言ふ。

「人類が我々の悲みに對してよりも我々の喜びに對してより完全に同情しようとする傾向をもつてゐるからこそ、我々は我々の富を見せびらかし、我々の貧困を隠すのである。我々の困窮を餘儀なく世間に曝し、而も、我々の境遇がすべての人々に明かであるにもかかわらず、誰も我々の苦惱の半分も認めてくれないと感じることほど心苦しいことはない。否、我々が富を求め貧困を避けるのは主として人類の情操に對するこの考慮からである。蓋し、すべてこの世の骨折リや大騒ぎは何のためであらうか。貧慾や功名心の目的は何であらうか、富や力や高名を追求する目的は何であらうか。それは自然の必要を充すためであらうか。最下級の勞働者の勞賃でさへそれを充すことが出来る。その勞賃は彼に衣食を給し、家や家族の慰めを與へることが出来ることを我々は知つてゐる。もし我々が彼の家計を嚴密に調べてみるならば、彼がその多くの部分を便宜品——それは餘計なものとも考へられるであらうが——に費すといふこと、及び特別の場合には彼が虚榮心や榮譽のためにさへ幾らかを用ひることが出来るといふことを我々は知るであらう。では彼の境遇を我々が嫌惡する原因は何であらうか。何故上流階級の生活に慣れてきた人々は、勞働はしなくてよいにしても、かの勞働者と同じように簡單な食事をし、同じように賤しい家に住み、同じやうに疎末な衣服をまよふに至るまで零落するのを死ぬよりもなほ悪いと考へるのであらうか。それらの人々は彼等の冒袋がより立派であり、茅家では堂々たる邸宅の方が安らかに眠れるとでも考へるのであらうか。むしろ反對のことが極めて屢々言はれて來たのであり、また實際、言はれて來なかつたにしても、極めて明白なことであつて、それを知らない者はないのである。では、總ての階級の人々を通じて行はれるかの競争はどこから起つて來るのであらうか。我々が我々の生活状態の改善 (bettering our condition) と呼ぶ人生の大目的によつて我々が目ざす利益は何なのであらうか。同情と喜悅と是認とをもつて注視されること。注意されること。注目されること、これが我々がそれから獲得しようとする目ざすことの出來る利益の總てなのである。我々をして關心せしめるものは虚榮 (vanity) であつて、安易や快樂ではないのである。然し虚榮は常に我々が注意と是認の対象であるといふ信念を基礎とする。富者は彼の富を誇る、何故ならば彼は富が自ら世間の注意を彼に惹きつけ、人類は彼の境遇の利益がきはめて容易に彼を感激せしめるところの彼のすべての愉快な情緒について行く傾向をもつと感ずるからである。このことを考へて彼の

心は滿ち足つて一杯になり、彼はそのため富が彼に與へる他のすべての利益よりも彼の富をより喜ぶのである。これに反して貧者は彼の貧困を恥しく思ふ。彼は貧困が彼を人類の目とゞかないところへ置くか、または人類が彼に注意することがあるにしても彼等は彼が苦しむ不幸と困窮に對して殆んど同感しないと感ずる。彼はこの二つの理由で心苦しむ。何となれば、無視されるといふことゝ否認されるといふことゝは全く異つた事柄であるけれども、しかも世に知られぬといふことは我々を蔽うて名譽と是認の光を遮るものであるから、我々が注意されないと感ずることは必ず人間性の中の最も愉快な希望をかき消し、最も熱烈な欲望を失はしめるからである。貧者の出入は注意されなくな、大勢の中にゐても彼自身の陋屋に閉ぢこもつてゐると同じく知られることがないのである。……これに反して、高位高名の人は世の中の總ての人々に注目される。誰もかれも彼を見て、少くとも同情によつて彼の境遇が自ら彼を感激せしめる喜びと得意にあやかりたいと思ふ。彼の行爲は公衆の注意的である。彼の一語といへども、一舉一動といへども、全く無視されるといふことは殆んどあり得ないのである。……そして若し彼の行ひが全く馬鹿げたものでないならば、彼はいつでも人々を關心せしめ、自分自身をして自分の周囲の誰でもの注視と同感の的たらしめる機會をもつてゐる。このことこそが、それが強ふる窮屈さにかまはらず、それが自由の喪失を伴ふにかまはらず、高貴といふことを羨望の的たらしめ、かつ人々の考へるところによれば、その追求に際して忍ばねばならぬ總ての勞苦や心配や屈辱を償ふ、いな更に重要なことであるが、それを獲得するために永久に失はれる總ての閑暇・安樂・安穩を償ふものなのである。」

右の如くスミスは人間の生活状態を改善せんとする努力は結局虚榮のためだと考へる。然しスミスは禁慾主義者ではなかつた。彼が虚榮だと斷定した富貴は主として封建的、な富貴や絶対主義的權勢であつた。そこに封建的、絶対主義的勢力に對してむしろ市民的なものを代辨した彼の市民哲學者としての面目が浮び上つてくる。このことは彼の社會秩序に關する見解をみて行くことによつてはつきりしてくる。彼は社會秩序をもまた同じ情操から説明して書いてゐる。

「富者や権力者の總ての激情について行かうとする人類のこの傾向を基礎として階級の差別や社會の秩序が成立する。我々の上長に對する忠順は、彼等の好意から得られる恩恵をひそかに期待してよりは、彼等の境遇の利益に對する我々の嘆賞から起つて

くることがより厭々である。上長者達の恩恵は少數の者にしか及び得ない、然し彼等の幸運は殆んどあらゆる人々の關心するところである。我々は彼等が殆んど完全に近い幸福の一體系を完成するのを助けようと切望する。そして我々は彼等を喜ばせるといふことの虚榮または名譽の外に何の報酬も受けないで彼等自身のために彼等に奉仕しようと欲する。それはまた主として又は全くかゝる服従の有用性に對する考慮に基く傾向や、それによつて最もよく維持される社會秩序に對する我々の恭順でもない。社會の秩序が我々が彼等に反對することを要求する場合にでも、我々はどうしてもさうする氣になれないのである。國王は人民の僕であつて、公益の要求するまゝに服従され抵抗され廢黜さるべきであるといふのが理性と哲學の教説 (the doctrine of reason and philosophy) である。然しそれは自然の教説 (the doctrine of nature) ではない。自然は我々に國王自身のために國王に服従し、その高貴な地位の前におのゝき膝まづき、その微笑を如何なる奉仕をも償ふに足る報酬と考へ、その不機嫌をあらゆる屈辱の中の最も甚だしきものとして恐れることを教へるであらう。……最も力強い動機でさへ、最も激烈な激情すなはち恐怖や憎悪や憤激でさへ國王を尊敬せんとするこの自然的傾向と鈞合ひをとらしめるには足らない。國王の行動が正當にか或は間違つてか右の如き最高度の激情を挑發したにしても、それはまだ人民大衆をして猛烈に彼等に反抗し又はその處罰や廢位を見たがつたりするまでには至らしめないのである。人民が終にさうするに至つた場合にも、人民は何時でも心の解け易いもので、彼等が従來彼等の自然的優越者として尊敬する慣はしとしてきた人々に對する彼等の自然的な恭順の状態に復歸し易いものである。彼等は彼等の國王の苦惱を見るに忍びないのである。憐憫が憤激に取り代る、彼等は過去のすべての憤怒を忘れる、忠節といふ彼等のもとの原理が復活する、彼等は彼等の舊主の破滅した權威を、彼等がかつて反抗したと同じだけの猛烈さをもつて、再興するに至るのである。」

こゝにスマイスの君主論がうかゞはれるが、それはイギリスの王朝に對するイギリス國民の傳統的な感情を基礎づけたものといふことが出来るであらう。立論の基礎となつてゐるのは主としてクロムウエル革命と王政復古および名譽革命に於けるイギリス國民の體驗であり、それらに現れたイギリス國民の王朝に對する國民的感情である。スマイスはロツク等の説き、フランス革命に於て實行されたやうな民主主義や革命は認論に反對であつた¹⁾。尤も彼は共和制の同情者ではあつた。然し彼は、少くともイギリスに關するかぎり、國民的傳統を無視する一面的

1) Cf. Part. VI. Sec. II. Chap. II.

急進主義者ではなかつたのである。と同時に重要なことは、彼が單に封建的傳統を墨守する絶對主義的保守主義者でもなかつたことである。彼は傳統的なものを肯定すると同時にその封建的絶對主義的側面を批判し、それに對する市民的なもの、進歩性を基礎づけようとしたのである。

ミスは貴族が權威を保持するのは知識・勤勉・忍耐・克己その他の徳によつてではなくて、言語動作の高雅なことによつてである。然るに身分の低い者が自分を目立たしめるのは高雅の如き貴人の徳によつてはなす。

「さやしくも身分の低い者 (the man of inferior rank) が自分を目立たしめようと思ふならば、それはより重要な徳によつてなければならぬ。彼は貴人の追従者に釣合ふだけの追従者を得せねばならぬ。而も彼は追従者に支拂をなすべき元本として彼の身體の勞働と彼の精神の活動以外のものをもたない。従つて彼はこれらのものを修練しなければならぬ、彼は彼の職業に關する勝れた知識とそれを使用するに際しては勝れた勤勉とを獲得しなければならぬ。彼は勞働に際しては忍耐強く、危險に臨んでは敢果にして、困窮に當つては毅然としてあらねばならぬ。これらの徳を彼は、彼の事業の困難・重要性および同時に正しい判断によつて、また彼が彼の事業を遂行する際の嚴格にして假藉なき勤勉によつて、公衆に示さなければならぬ。誠實と分別・寛容と率直がすべて普通の場合に於ける彼の立居振舞を特徴づけねばならぬ。そして彼は同時に、適當に行爲するためには最大の才能と徳とを必要とし、而もそれを立派にやつてのける者は最大の稱讚を博し得るやうな總ての職務に進んで従事しなければならぬ。これに反して、上流階級の人士 (the man of rank and distinction) は、——彼の榮譽はすべて彼の日常の立居振舞の適當なことに存し、そして彼はこのことが彼に與へ得るつまらぬ名聲に満足し、それ以外のものを獲得し得べき才能をもつてゐないのであるが——困難だとか困窮だとかを伴ひ勝ちであるものゝために困却することを欲しない。舞踏會で偉彩を放つことが彼の大勝利であり、情事の企みに成功することが彼の最高の偉業である。彼は社會の混亂を一切嫌惡する、然しそれは人類愛からではない、何となれば高貴な人々は彼等より下の人々を彼等の同胞として尊重しはしないからである。更にそれは勇氣のないためではない、何となればその點に關して彼は缺けることの少ないものだからである。さうではなくて、それは彼がかゝる職務に必要な徳を何一つもつてゐないといふこと、及び社會の注意がきつと他の人々によつて彼から引離されて行くであらうといふこと

の自覺からである。彼は些細な危険には好んで身をさらしもするであらう、また個々それがはやりである場合には戦役に従ひもするであらう。然し彼は忍耐・勤勉・剛毅および思慮を長期にわたつて繼續的に發揮することを必要とするやうな職務のことを考へると恐ろしく身震ひするのである。これらの徳は右の如き高い身分ステータスの生れの人々には殆んど發見されない。それ故、すべての政府に於ては、君主國に於ても、最高の官職は通常、そして細部の行政は全て、中等および下層階級 (the middle and inferior ranks of life) 出身の人々によつて占められたり處理されたりするのである。而してこれら中等および下層階級出身の人は、生れながらに彼等の上長である總ての人々の嫉妬や憤激によつて惱まされたり反抗されたりするけれども、彼等自身の勤勉と能力によつての上がつて來たのである。高貴な人々はそれらの人々を最初は輕蔑し、次いで羨望し、終には爾餘の人が彼等自身に對して振舞ふことを彼等の欲すると同じ卑屈さをもつて満足してそれらの人々に阿諛するに至るのである。」

かくして喜びに對してよりも悲みに對してより強く同情するといふ人間性に基く人間の富貴に對する嘆賞乃至崇拜、虛榮心乃至功名心は、上流階級に於てはなくて、中等および下層階級に於てのみ徳への道と一致する、とスミスは考へる。この點は第三節を讀むことによつてなほはつきりする。

三

第三節でスミスは「富者や貴人を嘆賞し、貧しく賤しき状態にある人々を輕蔑または無視するこの傾向によつて惹起される我々の道徳的情操の腐敗について」述べる。¹⁾

「富者や権力者を嘆賞いな殆んど崇拜し貧しく賤しい状態にある人々を輕蔑或は少くとも無視するこの傾向は、階級の差別と社會の秩序とを確立するにも維持するにも必要なものではあるが、同時に我々の道徳的情操の腐敗の大きな且つ最も一般的な原因である。富貴 (wealth and greatness) が屢々智慧や徳だけにふさはしい尊敬と嘆賞とをもつて眺められるといふこと、及び惡徳や愚鈍のみがその唯一固有の對象であるやうな輕蔑が屢々極めて不當にも貧困と無力とに向けられるといふことが、總ての時代に於ける道徳家の苦情となつて來てゐる。」

1) この節は第六版に於て初めてつけ加へられたものであつて、第六版に於ける最も重要な修正箇所の一つに屬する。

「我々は尊敬に値し且つ尊敬されることを欲する。我々は輕蔑に値し且つ輕蔑されるのを恐れる。然るに我々が世に出るや否や我々は間もなく、智慧と徳が決して尊敬の唯一の對象ではなく、惡と愚鈍が輕蔑の唯一の對像でないことを知る。我々は屢々世人の尊敬にみちた注意が賢者や有徳者に對してよりは富者や貴人に對して向けられることのより強いを見る。我々は屢々權力者の惡や愚鈍が罪のない人々の貧困や無力よりも輕蔑されることのより少いのを見る。人類の尊敬と嘆賞とに値し、それを獲得し且つそれを楽しむことは功名心と競争の目的である。かくも望ましいこの目的の到達へ等しく導く二つの異つた道が我々の前にある、一つは智慧の修得と徳の實踐とによつてであり、他は富貴の獲得によつてである。」

智慧と徳との眞實不動の嘆賞者は主として賢者と有徳者となつて、極く少數ではあるが選ばれた人々である。これに反して人類の大多數は富貴の嘆賞者であり崇拜者である。彼等は同じ程度の功績に於ては貧者や賤民よりも富者や賢人を尊敬するのは無論のこと、富者や貴人の傲慢や虚榮でさへ貧者や賤民の眞實にして眞面目な功績よりも遙かに多く嘆賞する。然し中等および下層階級に於ては富への道が徳への道と重つてゐる。

「中等および下層階級 (the middling and inferior stations of life) に於ては徳への道と財産への道——少くともこれらの階級の人々が獲得することを當然期待することの出来る程の財産への道——とは幸にも大抵の場合殆んど同一である。中等および下層の總ての職業に於ては、眞實にして眞面目な職業上の能力が、分別あり公正で堅固にして節制ある行動と合して、成功を齎さないことは減多にないのである。行ひが正しくない場合にも、時には能力が勝利を得ることさへあるであらう。けれども、習慣的な無分別・不正・無氣力・濫費は何れも常に最も美事な職業上の能力をさへ曇らせ、時には全然無力にしてしまふであらう。のみならず、中等および下層階級の人々は決して法律を越えるに足るほど偉くはないのであつて、法律は通常彼等を威嚇して、少くともより重要な正義の準則に對するある種の尊敬を拂はしめずにはおかない。かゝる人々の成功はまた殆んど常に彼等の隣人や仲間との愛顧と好意に依存する、そしてかなり几帳面な行ひがなければこれらのものは殆んど全く得られない。それ故このやうな境遇に於ては、正直は最善の政策なり (honesty is the best policy) といふ昔からある諺が殆んど常に全く眞實なのである。従つてこのやうな境遇に於ては我々は通常かなりの程度の徳を期待することが出来る、そして社會の善良な道徳にとつて幸なことには、これらの境遇が人類の大部分の境遇なのである。」

かくの如くスミスを見るところによれば、中等および下層階級に於ては財産への道が徳への道と重つてゐる。財産の獲得は徳への道を通ることなくしては達成され得ない。その限り徳が財産の獲得を媒介として實現されるのである。そしてそこに、經濟活動をも含めた現世的活動を虚榮に基くとしたスミスが經濟活動を重視する所以があるのでなければならぬ。彼の富貴に對する批判的な論鋒は主として封建的・絶對主義的なそれに向けられてゐたのである。彼は續けて書いてゐる。

「上流階級 (the superior stations of life) に於ては不幸事應は必ずしもさうではない。王侯の宮廷や貴人の客間に於ては成功や登庸が物の分つた事情に通じた仲間の尊敬にではなくて、無知で傲慢で高慢な上長の空想的で馬鹿げた愛顧に依存するのであるが、そこでは阿諛と虚偽が屢々功績と能力に打勝つ。嵐が遠い平安時には王侯や貴人はたゞ面白いことをのみ望み、彼は何人の奉仕をも必要としないとか、彼を面白がらせる者たちが充分に彼に奉仕することが出来ること考へ勝ちである。外面的な品のよきだとか、當世人と呼ばれるかの生意氣で馬鹿げた物のくだらぬ嗜みが普通武人や政治家や哲學者或は立法家の眞面目で男らしい徳よりも嘆賞される。總ての偉大にして畏るべき徳、會議や議會や或は戰場に適する總ての徳は、このやうな腐敗した社會に於て普通最も異彩を放つ不遜で無意味な阿諛者によつて、徹底的な輕蔑と嘲笑を受けるのである。」

『國富論』よりも後に書かれたこの第三節に於て、『道徳情操論』が『國富論』の基礎づけといふ意味をもつてゐることを實にはつきりさせてゐるやうに思はれる。要するにスミスは所謂利己的激情から出發して富貴に對する人間の欲求を分析し、それが徳と結びつき得るのは中等および下層階級に於てであつて、上流階級に於てではないことを明かにした。その意味に於て彼は中等および下層階級を主體とする經濟活動を道徳的に基礎づけたといふことが出来る。中等および下層階級はその後市民的なもの、發展と共に二つの階級に分裂して行く。『國富論』に於ては資本家階級と勞働者階級とはかなりはつきり區別されてゐる。然しスミスの當時に於てはこの二つの階級

は市民階級を主腦部としてなほ一體をなしてをり、國民の大多數として支配階級たる封建的ならびに絶對主義的な上流階級に對立せしめられ得たのである。

市民階級を含めた中等および下層階級がスミスに於て單に經濟的生産力の擔當者としてではなく、同時に新しい道徳の擔當者として捉へられてゐるといふことは充分注目し得るであらう。我々は『富國論』の中で封建的土地所有者の性格と市民階級のそれとの相違、及びそれに基く後者の國民の富の増進に對する積極的役割が基礎づけられてゐるのを見る。¹⁾ 市民階級の基礎づけは即ち資本の基礎づけである。彼は生産的勞働と不生産的勞働とを區別し、「君主もその下に奉仕する文武の百官も陸海軍の軍人も皆全く不生産的勞働者である」と極言しさへしてゐるが、また生産的勞働の維持に充當される基金すなはち資本と所得特に地代および利潤の中の不生産的勞働を維持するに用ひられる基金との割合があらゆる國民の勤勉または怠惰に關する一般的性格を決定するとも言つてゐる。²⁾

併しながら、スミスは單に市民階級を道徳的のものとして基礎づけたのではなかつた。同時に彼は正しくも市民階級の非道徳的な面を見落しはしなかつた。就中市民階級の利益と社會全體の利益との不一致を見逃しはしなかつた。そしてその面から見ると却つて土地所有者階級の全體的な面が浮び上つてくるのであつた。但しその際公益と一致するやうな立場にあるものとして捉へられてゐる土地所有者階級は封建的なそれではなくて、近代的な市民化された土地所有者階級であつたことに注意しなければならぬ。然し彼等の經濟的地位が彼等をして全體の利益を洞察するに足るだけの智力をもたしめない。勞働者階級についても同様のことが言はれる。これと反

1) The Wealth of nations. ed. by E. Cannan, Vol. I. p. 363, pp. 382-83.
2) ibid. pp. 318-20.

對に商人や製造業者は智力はもつてゐるが、その利益が公共の利益と一致しない。彼等は公衆を欺き壓迫するのを利益とさへするのである。¹⁾ その著しい例は同業組合的獨占と重商主義政策である。スミスはこれらの政策を要求した市民階級の反公益的性情を鋭く指摘してゐるが、然しその際忘れてはならないことはその鋭い非難の對象となつてゐる市民階級すなはち商人および製造業者といふのは主として重商主義政策を要求したやうな商業資本家および同業組合的獨占を要求したやうな封建的手工業者の意味であつたことである。少くともそれは自由主義を要求したやうな所謂産業資本家階級ではなかつたのである。スミスが立つてゐたのは、總ての階級を超えた全體、その全體の利益と一致するやうな生産者、總ての消費者の利益と一致するやうな生産者の立場であつた。そしてそれは當時としては新興産業資本家階級でしかあり得なかつたのである。勤勉で貯蓄心に富み、細心にして秩序を守るのはこの階級の徳であつた。そしてそれらの徳は自己の生活状態を改善せんとして富を追求するこの階級の努力に必然的に隨伴するものであつた。その故にスミスは自己の生活状態を改善せんとして富を追求する努力は虚榮を目的とすると言ひながらも、それを道徳的に是認することが出来たのである。周知の如く『國富論』に於て生活状態を改善せんとする人間の自然的努力が資本蓄積の從つてまた國民の富の増進の根本動機として繰返へし強調されてゐる所以である。

然しスミスが人間の生活状態を改善せんとする欲求乃至努力を利己的激情乃至それから導き出される虚榮心に基礎づけてゐるのは問題のあるところであらう。そしてその點に於て我々はスミスに於けるマンデヴィルの人生觀乃至社會觀を否定し得ないと思ふ。マンデヴィルは一切の徳を利己心や虚榮心に歸した。スミスは一切の徳をさうすることには勿論反對したけれども、少くとも經濟生活に於てはそれを肯定したのである。その點はスミスの自愛心の基礎づけを見ることによつてなほ詳しく吟味しなければならぬ。

1) *ibid.* pp. 248-50, pp 426-27.